【8】大時計の効用

クオーツなど電子技術の普及で、誰しもが個人的な腕時計やスマホで秒単位の精度で正確な時刻を知ることが出来るようになりました。

そのため、駅のコンコース、ビルの玄関ホール、講堂、会議室などの多数の人の集まる場所、すなわち公共空間から少しずつ大時計や壁掛時計が消えて行きました。
残されている場合も、デジタルの数字で表示される時計というより、時刻表示版という外見のものが多いようです。

かつて時刻というのは国家や為政者が一手に把握していて、それを鐘やタイコ、近代に到っては大砲の音で人民に伝えていたのですが、現代ではもはや時刻は他人に教えられるものではなく、万人が同時所有する情報の一種になってしまいました。

この事は、一見便利なようですが、複数の人の集まる場所では案外不便に感じることがあります。その場の関係者全員に共通するいわば“共有時刻”あるいは"公共時刻“ともいうべきものが失われたのです。超精密な時計で、各人が普遍的な“絶対時刻”を所有していても、それがその場というローカルな局面での全員が認識する共通の時刻であるとは感覚的になじめないのです。
会議室の壁に時計がかかっていると、開会の時刻に司会者が開会しても全く問題ありませんが、司会者が腕時計に目をやって開会すると、何処か独断で始めたようでぎこち無いのです。

かつての駅のホームの天井からぶら下がっている丸型のアナログ大時計が、その分針が何処かに在る親時計に同調して３０秒刻みに動き、発車時刻になると、ベルが鳴って列車が出発するという見慣れた光景は、駅の"指令所“で駅長か誰かが列車運行を管理しているという安心感をお客に与えるものでした。

駅に居合わせた多数の人に共通する時刻をいわば駅長が管理強制しているわけで、それがその場の秩序と連帯感を担保する役目をしていたと思います。

現代は、時差は別にして全人類が絶対時刻を所持していますが、それが全員に共通しているという確信が持てず不安になるというぜいたくな話しです。

人の集まる処には、その場の全員に見える“正確な”大時計が在った方が良いと思うのですが如何でしょう。